

ときめき、☕
喫茶文化@岐阜
カップ&ソーサー編

23

Q 写真のコーヒー碗皿は、製陶業以外の分野の人が意匠を担っています。さて、どんな職業の人でしょう。

A ファッションデザイナーです。

デザイナーが続々進出

昭和20年代後半から30年代は、毎月ごとに予約者の家庭に陶磁器が送られる頒布会が始まり、好評を得ました。昭和30年代後半から40年代になると、高度成長期で陶磁器も含め海外のファッションにも関心が高まり、昭和46年には銀座ブルーメや国内の百貨店で欧州の陶磁器を紹介、洋食器を購入する人が増えました。また引き出物としてもコーヒー碗皿や洋食のプレートが商品として人気を集めました。その背景には、結婚適齢期を迎える人口が増加する市場がありました。そして登場したのが、イ



森英恵やランセル、ジバンシーといったファッションデザイナーたちが意匠を手掛けたコーヒー碗皿(撮影・安藤茂喜)

タリアやフランスのファッションデザイナーによるコーヒー碗皿です。すっきりとしたおしゃれなデザインへの憧れなのか、日本でもデザイナーと直接契約して、その意匠を基に国内生産して百貨店などで販売するようになりました。

1950年代にクリスチアン・ディオール、ピエール・カルダン、60年代にヴァレンティノ・ガラバーニ、マリオ・バレンチノ、ジバンシー、70年代から80年代にランセル、ニナリッチ、ピエール・バルマン、イヴ・サン・ローランなどのブランド品が作られました。紙箱で包装も工夫され、高級感もあり、贈答品としても人気を集めました。

この販売方法は、日本国内のファッションデザイナー

ーにも向けられました。芦田淳、森英恵、桂田美、山本寛斎、花井幸子、さらに有名人やタレント、画家を含めると数百人を越す商品が生まれたのです。そして今も、さまざまな分野を描いた商品が作られています。きつと読者の皆さまのご家庭にも、デザイナーブランドの碗皿があるのではないのでしょうか。

(近代国際陶磁器研究会顧問・高木典利)

△第2、4水曜日に掲載▽

◆ ◆ この連載が展覧会になります。企画展「喫茶文化美濃 カップ&ソーサーの歴史」(東濃信用金庫主催)として4月10日から7月1日まで、多治見市虎渓山町のとうしん美濃陶芸美術館で。入場無料。